明治二十年八月十五日刊行

毎月一回發行
壹冊正價廿錢
全國無郵送稅

通信女學講義錄

第四卷

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

〇通信女學發行の主旨

女學雜誌社　巖本善治

當今女子教育の説、甚だ隆んとなりて、各地の女學校は、日に日に其數を加へ、此に就て學文する女子も、亦た月々に多くなれり、此模樣にては、今四五年の内には、女學の進歩非常にて、おさおさ男子にも劣らざる有爲の女流を、多く出さんは勿論、婦人一汎の有樣必ず一變して、今の如き交際にては、事足らざるに至るべし、故に、今日に於て、尙ほ學文せざる貴孃方は、一日も早く學校に入りて、一と通りの修學を爲し、決して時勢に後れざる樣に勉めらるべし、之れ甚だ大切の事なり、然るに、既に一家の妻となりて、家事向万端を取扱はるゝ方々は、固より學校へ通はるべき餘暇もなく、又ゆる〳〵と讀書さるべき便利も少かるべければ、此樣の人々が、別に學文さるゝ方法なかるべからず、抑も、一家を脩るには、家内衞生家内經濟の事を初として、母親たるの覺悟、育兒の心得などは、是非とも學び置かでは相成らず、特に又追々開化して、交際の有樣も變化する今日に當りては、文學理學の一班より、歷史地理の大略、及び、西洋女禮式の一と通りを承知せざれば、大なる辱を受ることもあらん、故に、此度かゝる妻君母親たちの都合を計りて、通信女學と申す仕組を設け、家内に居ながら、少々宛の餘暇を覰みて、學文さるゝやうの方法を備へ、二三年にて恥かしからぬ程の學力を得さするやう、敎授すべし。

畧則

通信女學は、月々中本六十頁以上の講義錄一冊を出版す。右講義錄には、女子生理、育兒心得、家内經濟、女藝案内、萬國史略、文學一班、理學一班、家内理學、西洋女禮等の諸科を講述し、且つ、問答叢話の一欄を置て、右講述の上に付き、質疑を寄せたる人々に應答し、又婦女學文の心得、其他諸般の有益なる事件をも、書載すべし、尤も右諸科講述の終るを待ち、漸次に、尙更に高尙なる課を敎授す。右講義錄の讀者は、文意事理等に關して、質問を寄するを得、郵劵封入の上、右問を送る時は、可成速に應答し、尙ほ人に示して益ある分は、問答欄内に收む。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

論説文躰式　史論　寓論　時論　經論

○文學一斑 （第四回）

文章の體式 （其二）

論説　論ハ倫なり群言を彌綸して衆理を研するなりと劉勰がいへる如し。史論とて古今の歴史につきてその是非、得失、善惡、正邪などを論ずるものあり新井君美が讀史餘論の類はこの文例となるべし寓論とて昔の史傳などを假きたり之に已が意を寓して現時の邪正得喪を論じあらはすもあり「時論とて政治にまれ經濟にまれ道德のことにまれ何くれとなく現在さし當りての事等を論ずるもあり「經論とて專ら教の書につき或ハ論じて其邪をしりぞけ或は論じて其正をあらはし或ハその義を敷

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

說は論と略ぼ同じ

論說の文例

衍するもあり論の種類を細かに分たば尙はその數おほかるべけれど約めていはば理に據て辭をのべ其正理の所在を人にしらしむるなり。然ばこそ李性學の文式にも論ハ理なり反覆して事情を盡すを貴ぶ」といひつれ。說ハ解なり述るなり義理を解釋し己の意をもて之を述るなり」とあれば大概ハ論と異なることなし。盧學士いんらく說ハ己の意を出すべし横說、豎說、抑揚、典贍を以て上となす論と大に異ならず」と。斯るが故に說のことハ別に論らはじ。さて論體の文例にハ前にもいへるごとく源氏はゝきゞの雨夜の品定めなどハその體式なるが徒然草の四時をり〳〵の景物をあげつらひたる條また十訓抄な

二

る人の動作のことをいへる條のごときもみな論の體とやいはまし。近世のものにてハ蒿蹊が歌の躰裁の論。久老が歌の風致の論ならびに詞に近古なき論（蒿蹊および久老の論文ハ文苑玉露書名に載す）これらの他に本居宣長、村田春海、藤井高尚等の論の文章かず〳〵あり皆その文集などに見えて例とすべきが多し

解釋文躰式

解釋　文心雕龍に解ハ釋なり結滯を解釋し事を徵して對るなり」といへるにてその義あきらけし。凡て人の疑

解釋の文例

ひ結ばれたる惑ひを解示すをいふ。徒然草の白拍子のこと並みなむすびのことなど云る條ハこゝなる文例に當らまし宣長が玉勝間書名に載たる苗字の解。富士谷御杖の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

尺牘文躰（六）

今の世の書簡の躰ハ建暦の頃のものに見えたり建暦ハ今を去る凡ソ六百八十年餘

なとへどの別（北邊隨筆）。石原正明の女の眉そり齒を染る事の解釋（年々隨筆）。小山田與清の朝顏の考（擁書漫筆）これらの文ハ雅たるにハあらねど解釋の文躰を見るにハ足ぬべし

尺牘　こハ俗にいふ手紙なり尺牘ハ支那にてとなふる稱にて手簡といひ書といふも皆おなじ本邦にてハ消息といへり。この文躰も世とゝもに移りかはりて昔しのゝと今のゝとハ甚く異なれり詞もそのつかひざまも同じからぬなり。今の世の躰になりたるハ、建曆のころにやあらん。扶桑拾葉集に載たる定家卿、家隆卿、西行法師越部禪尼などの消息文を見るに、候ふまゐらせ、などの詞のつ

四

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

中古より前なる尺牘ハ漢文を用ゐたり

かひやう今の世の俗文の躰におほかたハ違ふことなし。さて中古あなたの消息ハひたふるの漢文にかきしならん。本朝文粋（書名）にその漢文なるが數多くみえたれど和文なるハをさ／＼物にみえず。中古こなたの物語書にぞ平假字にてかける雅言の消息ハおほく見えたりける。中古の

中古の消息の文例

消息の文例を見んとならバ源氏浮舟の巻（六丁右近より大輔のもとにおくりたる年始の書）うつほ物語（卅巻四十二丁女御より藤壺におくれる書）源氏榊の巻（三十三丁源氏の君が藤壺の中宮に紅葉をおくり給ふとて命婦につかはしゝ書）狭衣四の中巻（四十六丁皇后宮より女君のもとに贈り給へる書）源氏夢の浮橋の巻（十四丁小野ゝ僧都より浮舟君におくりたる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

近古の消息文例

近世の消息文例

書)など尚は數おほかれど煩はしければ多くハことに掲げず。近古の例にハ源平盛衰記(新大納言成親卿備前へ流され給ふをり小松内大臣殿が京より贈れる書)東鑑文治元年正月六日の條(源賴朝が參河守範賴にをくりたる返書)平家物語(若君、姫君の返書)の類なるまし近世の達人たちの消息文ハ鈴屋文集、琴後集、松屋文集などにわり。婦人の文かきの消息ハたみ子の集、よの子の集に見ゆ。消息(尺牘)ハあだし文とハたがひて人のもとに差向の用をかきおくりて便すべきものにしわれバ智しだちて殊更に古き躰をうつしいで己が意の人に達せぬハ愚のわざなるべけれど無下に詞ざま卑しく且ハ思ひのほどだにのべ

六

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

得ざるも心劣せられて口惜きわざなりかし。古へ今のよき消息どもを一わたりハ見もし習ひもして辨へたらんにハ智しう差出てこそ爲ざれ今の俗の消息かゝんにも便ぞおほかるべき

附

消息に昔しのと今のと詞おなじうして遣ふところの違へるがあり（忝けなく、目出度、此間、あり難き、旁た、などの類）詞も遣ひどころも同じきやうにて尙たがひたるがあり（申、御、必、などの類）昔のみやび言をよこ訛りて用ゐたるもあり（申越ハの越しのたぐひ）雅言ながら今の用やうの俗びたると遣ひかたの漢文やうなるとあり（將も又も雅言なれど重ねて將又と云ハ俗なり且又の且も雅言よハあれどそのうへといふ意につかふハ漢文やうなり此類なほ多し）又字音の語のつかひざま昔しと異なるなり（無是非の類この語昔しハひとむきにと云ふ意に用ゐたるを今ハせんすべなき意に用ゐるなり）これらのと心得おかでハ古き消息ハ讀くだし難し然どこゝの條にハ文の躰式を示すまでの心

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にしあれバ此類のことゞもくだ〳〵しくハいはず此ハ後にいたりて別に條を設け更にこまやかに説明すべし

又各文躰式をのべたる下にたゞ書冊の名のみならず其文をも抄出して肝要のかど〳〵を詳明に示さまほしく思ひつれど餘りに言長うなりてハ過たるハ尙ほ及ばざるの諺にかなはんことを恐れてたゞその大躰をあら〳〵にいへり茲にいひのこせる細かしき事どもハ後にいふべき機をえて説いでんとこそ思ふなれ 八

●正誤

第二號九頁一行目易の傍訓みやすきハめやすき

同　一〇頁附言四行今世ハ近世

同　同　五行變遷の傍訓かわりうつりハうつりかわり

第三號五頁七行當時の傍訓このころハそのころ

同　七頁十行記の傍訓しおハしる

同　一〇頁三行跋の下傍丶ハ誤入

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寒暖の相違を來すゆゑんの事

○家內理學（第二回）

第一章　地球上溫熱の出處及び分れ方の事

今ま、爐の上へ手を置けバ、溫たかに覺ゆべし、又た氷の上に觸るれば、冷やかに感ずべし、双方の感覺は、何れも元來同樣の働にて起るものなれども、前には、爐よりして手に働き、后には、手よりして氷に働きたれば、斯く寒溫の相違を來すものなり、然れど、其元因を云へば即ち、同一の者彼に在ると、此に在るとの違ひに由りて、出來るものなり、此の者を溫熱と云ふ。

溫熱の形質何如につきては色々の議論あり、或る說には、之を、一種の流動躰となし、其躰甚だ微かにして、重さとて

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

温熱の形質の事

あらざるほどのものなれども、惣べて、何物の中にも混入し、また何物とも、能く混合するの性を有せりとして此の流動躰に、カロリック（温液）と云へる名を附したるものあり。又た、一説には、温熱は、元來形躰あるものにあらず、只だ物の運動するより起る處のものにて、其氣段々に傳はり行くの性質あるのみなりと云へり。双方とも一理あれども、何れか眞なるを知らず、結局吾人は、温熱の形質につきて、未だ確かなる事を辯ぜず、只だ唯だ其の決果たる働の上よりして、之を辯知するに止る。

温熱の働の事

則ち、其決果に依りて之を見るに、温熱の現象は、已れに取て、或は温かく、或は冷やかに感ぜしむるものなり、其氣何

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

大陽より發する温熱の事

物の中にも入り込み、亦何物の中にも働き、其力によりて、万物の形狀を色々に變化し、吾人の內外に驚くべき運動を起す所の元因となるものなり。

地球上の温熱にて、先づ第一に論ずべきは太陽より來る所のものなり、之は所云る光線なるものに伴ひて、地球上に參るものなるが、其力の洪大なるは眞に驚くに堪へたり、假りに之を計算して、其大略を云はゞ、太陽より發する温熱が、地球の表面一平方英尺の上に於ける、一年中の力は、氷五千四百英斤を溶かすに足るべし、即ち、氷五十四英斤にて一立方英尺の量となるものなれば、前に申したる温熱一年間の力は、丁度高さ百英尺立方の氷の塊を溶く

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

に足り、全地球の表面を、高さ百英尺丈けに包みたる氷は、一年にして全く溶くるの割なり、而して、太陽は、素と、二十五日目に一轉して、其表面の色々の部分を、吾が地球へ向くるとなるゝ、斯く日々同樣の温氣を下すを思へは、太陽の全面は、皆な一樣に温熱を出すものたると明らかならん、故に、地球が太陽を距ると同樣の隔に於て、高さ百英尺の氷を積みて、丸ろく環を作り、地球の軌道の如く太陽の周圍に備え置かば、之も亦た一年にして全く溶解すべく、若し又太陽の表面を直樣氷にて被はゞ、一分間にして厚さ三十八英尺六分を溶くべく、一年にして十英里半の厚さの氷を溶くに足るべし、太陽が温熱を發するの力、洪大 三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

なりと云ふべし故に地球が太陽より温めらるゝの工合は恰も尤も激烈なる竈の火に七倍せる程の火熱を有し而も其表面は五百万平方英里もある大なる天の火爐よりして億里を隔てゝ暖氣を受るが如しと云ふを適當とす。

星より發する温熱の事

吾地球は太陽よりして斯く夥しき温熱を受るとは雖ども地球が受るところの温熱こと〲く皆な太陽より來るにはあらず抑も太陽は前にも云へる如く非常の發熱をして日々莫大の温氣を出すとなるに其温熱の中ち地球の表面へ到着するは云ハヾ只ヾ僅かの事にて其外廣漠たる宇宙へ向けて飛散すると數ふべからざるほどに

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

多き者なり、然らバ、此の宇宙に向つて飛散したる温熱ハ實に無益に費さるゝ如く見へて、人世にハ何の效能もなきかの如く思ハるれども、決して然らず、天に散在する星辰は、亦た夥しき者にて濱の砂の數ふべからざるよりも尚多く、遠近に存在するものゆへ、彼の飛散したる温熱は大抵アチコチにて此の數多ある星の爲に受取られて、之を温むるものとなるなり、而るに、此星は、亦た互に此の温熱を反射して、相ひ温むるものなれバ、(此の理後に至り再び解說すべし)其の仲間として吾が地球へも、温熱を反射するとなり、依て、其力は少々なるものとしても、數限りなき天の星々よりして來り集るものなれバ、此の元因より

一四

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

して地球が温めらるゝと、亦甚だ大なるものなり、故に、太陽より受る温熱は、何如に洪大なりと云ふとも、之のみにて、外に星より來る所の温熱なくば、地球上の草木動物は、兎ても生活するとあたはずと云へり、左れば、ポイルレット氏の計算に據るに、彼の數多の星の力によりて地球を温むる熱氣は、一年にして、厚さ八十五英尺の氷を溶くに足れりと云ふ、太陽の發熱は、厚さ百英尺の氷を溶くに足ると云へる前說と比較するに、其相違の數甚だ少く、眞に不思議に思はるゝ程なれども、彼の月が天に懸りて見ゆる十寸鏡ほどの大さの內にも、時としては、數千の星遠近に集り居るものと思ふ、時は亦た奇しむに足らざるが如

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

地球表面温熱を受るに相違ある事

く考へらるべし。
前に申したるは、地球の表面を一様に見て、扨て、太陽、星など の温熱が、何如ほどの働を為すやと計りたるとなれど も實際には、地球の表面ハ、時と場所とに依りて、何日も温 熱を受るに相違あると、勿論なり、例へば、晝は夜よりも多 く温熱を受け、夏は冬よりも多く受け、地球の赤道の近邊 は、南北兩極の邊よりも多く受るが如し、之は、全く、地球が 太陽に面する工合に、陰陽遠近の相違あるよりして起る ものと知るべし。

第二章　温熱と生物との關係の事（上）

地球上東西南北の相違により、又は、高低山川の差異に隨

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寒暖に由て生物に相異ある事

つて、此處に生長する草木も、彼處には生ひ立たず、彼處には多き虫獸も、此處には少しも見へざる如きとあり、之れ、必竟其土地土地にて受る温熱に相違あり、隨つて寒暖の度の均しからざればなり、故に我國の九州四國よりして、北海道の北へと巡り行き、又は富士筑波等の山の麓より其巓へと登り行くべし、生物の種類漸次に變化するを見るべし、」故に草木にて云ハヾ、先づ尤も暑き熱帶の地方には、椰子、バナヽ、及び種々のカッラの類繁茂すべし、之より少し南北に向へば、橙、チレンヂ、佛手柑の如きもの多く、更に進めば、槲、栗、の類より、唐花草、及び、常春藤の如きもの茂り、更に進めば、松杉の如き針葉樹多くあり、遂に南北の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寒暖に由て人身に變化ある事

両極に近づけバ、草木段々に減じ、其大きさも追々に小くなり、遂に全く草木なきに至るべし、之は、此れ、地球の赤道より両極に行く道線の紀行なるが、谷間より高山の巓へ登るの順序も、亦た之に均しきものと知るべし。又た動物にて云ハヾ、冬と夏とに依りて往來去歸する鳥あり、北方に熊あり、南方に虎あり、印度に象あり、砂漠多き邊に必ず駱駝あるが如く、亦た夏に虫あり、冬に藏るゝが如く、何れも皆な寒暖が動物に於けるの關係なるべし。

然るに、人間も、亦た、生物なれバ、動物植物と均しく、温熱の多少の爲に、身躰に變化を受るとあり、例へば、北方冱寒の地にハ、人民十分に生長せず、大抵丈低くき、形醜くき頭大

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

各國民の服制の事

きやかに手足短かく、節々太とく、全躰の樣姿蹲こまれるが如く、伸びざるが如く、殆んど其邊に多き熊猴の形に似たり、然るに、熱帶暖地に近くに隨ひ、丈高く、手足十分に伸び、全躰度を得て、容貌甚だ恰好なるが如し、之れ、人間も亦た、寒暖に由て身躰に變化を受るものなり。

而して、各國の人民が、其身に感ずる寒暖の相違何如に太甚しきかを知らんとには、先づ衣服の制の、各國どれ程に相違するかを見るべし、例へば、西印度島の人民は、身躰に綿一たヽみを着くるとも、甚だ不快なるが如きに、グリーンランドの人民は、毛皮毛織の品を、最と多く重ぬるが如し、此間種々の相違を各國の上に徵して見るに、以てその

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寒熱に由て人心に影響ある事

寒暖の度の一々に異るを知るなり。

然るに、寒暖の相違は、啻に、人の身躰のみならず、其心の上にも、大なる相違を起すものなり、例へば、冱寒の土地にては、身躰を縮めて、感覺を鈍らせ、温暖の土地にては、身躰の血脈を開きて、自ら外物に感ずるの力を強くするが如し、故に、寒國の人は、情鈍ぶく、遲く、然も勉强嚴格にして、或ハ、愚なるが如く、動ぜざる所あり、蓋し、此邊の土地の瘦せたると共に、思想の力も亦た豐かならず、惣躰考に乏しく、發明少く、想像力薄きが如し、之に反し、極熱の土地には、人民亦た極めて感覺鋭どく、平生怠惰にして、女の如くなれども、時として猛烈なる事を成し、好み深く、目論見亦多少賢

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

こく、想像力は洪壯偉大の事を喜びて、惣べて、勝手亂暴の念を立つるなり、然るに、此の兩方の中間に存する所、云る中帶地方の人民は、氣候の温和なるが如く、性質も亦た餘り極度に走りたる所なし、即ち、怠るの風なく、而も、鄭重なり、亂暴の弊なく、而も、目論見多し、其社會には、公平と自由行れ、人々の氣性守る所ありて、各個主義を保ち、志想高尚にして、尚は面白き想像を爲すとあり、故に、吾人は、氣候の寒暖に隨つて起る所の結果を見るに、其及ぶ所ろ、啻に身躰の上のみならず、併せて人の氣性、國民の氣風にも關係する所あり、故に、ドレーパル氏の言に、古來英雄の出處を考ふるに、地球上殆んど一種の區域あるが如し、即ち、南半

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

球には、未だ一人を出さず、北半球にも、或る緯度の内に於てのみ其現れたるを見ると、但し、氏が此の言葉は、俗に云ふ所の英雄を指すにあらず、天下万民の光となつて、神の眞理を之に現示したる如き人を云ふとなるが、斯る偉人の出生するには、亦之に必要する所の温熱を備へたる土地にあらずば、能はざるとの趣と存するとならん。

二三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

古代の東方諸國の事

南西亞細亞の事

○萬國史畧（第三回）

第五章　古代東方諸國位置の事

古代の東方諸國と云へる中には、埃及、アッシリア、及び、バビロン、猶太、フホニシア、印度、並びにペルシア等を含むとにて、此等を以て、當時の文明を卜知するものなり。

然るに、右古代諸國の中、たゞ埃及を除く外は、悉く皆な亞細亞洲内に在り、亞細亞は、極めて古へより、斯く文明に關係ありたるなれども、而も、其實は、只ゞ洲内の一部分のみ、其場所となりたるなり、即ち、亞細亞洲の南西の土地、此等の諸國の位置となりて、万國史の記する所となれども、彼のアルタイ山脈を限として、其北方に存する亞細亞洲ハ、

土地も荒れ、人民も開けずして、古代の開化には、全く關係あらざりしなり。

而して、中央の亞細亞洲、即ち、北緯四十度より五十度に至る間に存して、古人がシヽア（Scythia）と稱したる部分は、面積甚だ廣けれども、耕地は尤も少く、大抵は牧場となれり、茲よ、亦た多數の住民ありしが、大率常住の民にあらず、所々に漂泊して、居場所を定めず、政治は、所云る宗長政治（古老又は宗僧を奉じて統領と爲すの政治）にて、支配も行屆かざれば、別段万國史に影響を及ぼせるほどの働も得せず、差したる運動もあらざりしなり、但だ、彼のタルタル人種、即ち、韃靼人と云へるが、平生廣漠たる原野に住居し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

南西亞細亞三分の事

第一部の事

ながら、時々、文明の地へ伐つて出で、之を侵したるのみは、稍や想躰の歴史に關係する所あるなり。

故に、亞細亞洲中にて、古代諸國が運動したる舞臺は、即ち、南西の部分なり、而して、此の南西の亞細亞洲をバ、便宜の爲め、左の三部に區別するを常とす、云々、イウフレーテス河の西方、一なり、云く、イウフレーテス河並にタイグリス河の傍地、二なり、云く、ザグロス山並にインダス河地の間に在る邊、三なり。

第一イウフレーテス河の西方には、小亞細亞の半島あり、茲には、希臘の諸殖民地あり、亦た、リヂアを初として、數多の國ありき。又たシリアと云へる地ありき、之は地中海の東

濱に枕める地方にして、本部シリアと、フホニシア（レバノン）と地中海との間に位す）と、フホニシアの南に當るパレスチンとの三部に分る。又た、南西の方に走れるアラビアの半島あり」以上の三をバ含む。

第。二。イウフレーテス河並にタイグリス河の傍地には、先づ、アーメニアとて、小亞細亞とカスピアン海との間に存したる、高臺の地ありき。次に、アッシリア本部とて、タイグリス河の東、ザグロス山の西に横はる土地ありき。次に、バビロニアとて、タイグリス並にイウフレーテス兩河の末流に介まりたる、漂積地と、西の方シリアの砂漠に達するまでの土地とを含める地ありき。次に、チャルデアとて、ペ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第二部に於ける古代の三大王國の事

ルシヤ灣の頭に臨み、イウフレーテス河の末流より、西の方シリアの砂漠に至る地ありき。次に、メソポタミアとて、右イウフレーテス及びタイグリス兩河の間に横はる地ありき。次に、又たバビロニアの東、タイグリス河を沿へる邊の地方、スーシアナと云へる地ありき」以上の六つを含む。

但し、右の如く、土地の名を分け、全く區別して、其場所を記るせども、之は、一々異りたる人民が押領して居りたるものと思ひ違ふべからず、凡そ、紀元前六世紀の比ろ、ペルシア王國が勢力を增して、惣べて此等の地方を悉く侵畧したるまでは、此邊に、三の大王國ありて、右イウフレーテス

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

並にタイグリス河の傍地をバ支配したることあり、所云る三の大王國とは、即ち、チャルデア、バビロニア、及びアッシリアあり、然るに此中、アッシリアの王國と云へるは、其國力の尤も熾んありし比ろ、ザグロス山より地中海に至る間の土地をバ悉く管轄したり。

第三ザグロス山並にインダス河地の間に在りたる土地の中には先づ、昔しイランと云へる、ペルシアの臺地ありき、之は、ザグロス山脈の東に横へりて、恰も此の山に依り、ザグリス、イウフレーテスの兩河より隔たりたるものあり。又た、北の方カスピアン海に對しては、メヂアと云へる地ありき。南の方ペルシア灣に到るまでには、即ち、本部ペ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

漂流地に始て國を建設する事

ルシヤありき。之より遙か東に渡り、南に達して、インデアの半島あり、之にて古代亞細亞の文明地東方の境界とはなりたり。

歷史を考ふるに、古しへ、最も早く隆盛となりたる國々は、ナイル河の漂流地、タイグリス河竝にイウフレーテス河の漂流地、及び、インダス河の漂流地等に出現したり、之は、理學上面白き理由のあるとにて、文明の發達には、尤も注意すべき出來事なり、蓋し、漂流地とは、河々より流れ集りたる塵芥土砂等を以て成りたる土地にて、惣じて、地味豐饒、百穀野菜の能く出來る所なり、然るに、古の人民は別段精微の耕作法を知つて穀菜を培養するにもあらず、必竟、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

南西亞細亞に最初の文明ありたる事

天然に草木能く生長繁茂する如き土地をば擇んで、茲に住居するとなれば、扨ては、斯く、何れも漂流地に於て最初の國を打建つる事となれるなり、然らざる瘠地には、暫時にして穀菜の出來方惡しくなれば、住民ども、久しく其地に留るあたはず、所云る草を追ふて、先へ先へと移住するより、遂に此邊に定りたる國をば設くるに至らざるものなり。

斯て、最初の國民は、即ち、亞細亞洲中に起りたるものなるに亞細亞洲中にて所云る漂流地の多くあるは、只だかの南西の部分のみ茲には、定めし穀菜豐かに出來たらんと思はるゝ由あるのみか、言語學の上に徴して考ふるも歐

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

羅巴人種ハ、惣べて西方亞細亞より來れるものならんとの跡もあれバ、此の南西の亞細亞は、好し、例令ひ最初人民を創造されたるときの寢床にてハあらざるにもせよ、世界の文明を始て守り育てたる場所ならんとは、甚だ明白なり。

眞正の歴史の事

扨ても、太古の事漠として明ならず、人祖出生、人類散布の事、先づ第一回に於て講述したる如きものと假定し置き、之よりして、眞正の歴史に移らん、即ち、万國の進歩に關係して甚だ明白なる證據の存する如き人民を始として、以下漸次に近代に推し下るべし。

第一に現れ出る主人公の事

斯て、幕を開く、先づ第一舞臺に現ハれ出る國民の中、其主

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

人公となるは、即ち、ナイル河の傍地に住ひたる埃及、及び、チヤルデアなり。

之より以下第六章に埃及、第七章にアッシリア及びバビロン（此内にチヤルデアあり）、第八章にヒーブリウ、第九章にフホニシア、第十章に印度、第十一章にペルシア、を分説して第十二章に總論し以上は第一篇となし。第二篇には希臘。第三篇には羅馬。第四篇には中世諸國。第五篇には近代諸國。と分説すべし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○西洋女禮（第四回）

第八章　婦人裝飾の事（下）

白服の事

身躰の大いなる人は、白き衣服を着るべからず、爾く躰を大きく見するの失あるべし。

喪服の事

喪服には、黑と緋の衣服、又は、黑とスミレ色の衣服を用ゆるを宜しとす。

夜會服の長さの事

夜會に出づるもの、殊に其節舞踏せんとする婦人等は、餘り長やかなる衣服を着るべからず、多少流行風に外れて裾を短かくしたりとも、寧ろ進退に不自由なきを宜とす。

靴と手袋との事

凡そ、善く仕立てたる靴と、傷なき手袋とは、夜會に出る婦

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

人方の決して欠くべからざるものなり、但し、靴は、其形に就て云ふのみ、色と品とは人々の自由たるべし。 三四

飾りの事

夜會には、玉石の飾を多く用ゆるを可とせず、寧ろ自然の花、又は造り花を以て飾りとするを可とす。

年若き女等の飾の事

特に年若き娘子等は、玉石の飾を少くすべし、凡そ斯る人並に未婚の方には、瑱珠にて造りたるを最上とす。

飾りの品の事

玉石の飾は、必ず眞物にて、且つ良好の品なるべし、年の若きと老たるとを問はず、之に偽せ物を用ひたるほど、宜しからぬはあらずと知るべし。

玉石類を用ゆる禮式の事

玉石類を用ゆるの法は、亦た衣服を着くると均しく、其夫々の禮式あるとなり、例へば、ダイアモンド、瑱珠、紅寶石の

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

如き、惣べて透明なる寶石は夜會に用ひ、決して午前の會に用ひざるべく、又た、朝には、指環は成るべく淡泊にして、而も、重やかなるを用ひ、又決して小き玉を用ひず、寶石類を使ふにも、只だ珠かざり、時計、及び時計の鎖等にのみ用い、其外に着くべからざるが如し。

寶石類眞否の別の事

寶石類は、必しも價高きが宜しきにあらず、亦た、輝り耀けるか立派なりなど思ふは、未だ至らざる婦人方の考なり、故に、能く行き通つたる女は、ヲパル(蛋白色にして稍や透明なる寶石なり磨いて飾に用ゆ)を好めども、事を知らぬ婦人は、翡翠石、サツフヒル(水晶の一種)紅寶石の如き、見榮張りたるものゝみを賞するなり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

全躰のツリアヒの事

また、假令ひ、夜會の衣服立派にして、寶玉宜しきを得たりとも、髪くしけづらず、カラ汚れ、上は靴シカと合はざるなど、不調子の事あらば、全躰の裝飾も、何の効能なきものなり、

手袋の事

婦人の道路を歩むときに、必ず手袋を穿つべし、尙は手袋は必ず、若山羊又は子牛の皮にし製したるものなるべし毛糸又は木綿などにて造りたるは、決して用ゆべからず。

香物の事

香水は、夜會の時にのみ用ゆべく、而も、其際たゞ程よく使うべし、而して、其品は、良好なるべし、彼の下品の香水を用ゆるほど、面白からぬはあらず、但し、麝香は、決して用

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ゆべからず。

衣飾に關する大要の心得方の事

要するに、裝飾を好くするは、婦人の身にとりて、一つの嗜なみなれば、決して之を輕忽にすべからず、然れども、之が爲に、數多の時間を費し、營々その事にのみ思をこがすは、惡ろかなるのみか、反つて惡しきとなり、凡そ流行は、婦人の爲に起るとにて、婦人は流行の爲に存するにあらねば、日夜流行を趨ふて走る如きとありては相成るまじきとなり。

第九章　婦人朝夕宴會の事

朝の會の事

朝の宴會(モーニング、パーテー)とは、甚だ近代に起りたるものなり、年中いつも致すとにあらず、大抵五六七の三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ヶ月中にのみ限るとにて、時刻は、凡そ、二時に始まりて、五時に終るを禮とし、遊ハ、會話、音樂、クロッケー、玉突き、弓矢などなり。

夜の會の事

夜の宴會（イヴィニング、パーテー）は、大抵午后、九時に始まりて、夜半もしくは更に晩くまで行ハる、此間、始終在らざるとも宜し、時刻より遲く來りて、早く歸るとも勝手なり、故に、一夜に、二三ヶ所の夜會に臨席することを得るものと云へり。

女主人へ挨拶の事

夜會に入りて、自分の性名を通ぜられたるときは、その室内に在る他の人々、及び、自分の友人等へ挨拶せず、まず會を催したる女主人に一禮すべし、凡そ、客人多き大會

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

には主人公大抵は入口に立つものなり、但し、餘り郡集したるのみか、主人その眞中ほどにても有らんには、此處へ參る途中にて、出で會ひたる人へ、挨拶するは苦しからざるべし。

慣れぬ所へ參りたる時の事

近頃ろ、始て知己となれる人の家に參り、特に客人悉く未知の人ならんには、其際、尚更ら心掛けて、輕ろく自由に會話すべし、室の一方にかゞみ、又は、僅に心易うなりたる一人に取りつきて其人とのみ物語る如きは、甚だ面白からぬものなり。

樂を懇望さるゝときの事

音樂の嗜なみあるもの、會に臨んだるとき、一曲を奏せよと所望さるゝ時は、再三強いて請はるゝを待つなど、物

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

躰風を止め、直ちに承知して、之に應ずべし、尤も、之は、其節の女主人公が所望したる時にのみ云ふなり、其他の人々が、斯く申したればとて、女主人の懇望あるまでは、必ず扣ゆべきなり。

客人が奏樂唱歌する時の事

客人が音樂を奏するか、又は、唱歌をうたふ時ハ、余の客人たるもの、何れも靜かにして、之を聽くべし、凡そ、奏樂唱歌を爲す人は、此際、他の人々を樂しませんとて致すとなるに、之に關からず、騷々しく喧しくせんには、譬ふるに、人の談話を仕かくるとき、之に背を向けて、餘人と談しするが如し、失敬の極なり。

奏樂唱歌する者の心得事

音樂を奏するものハ、宜しく心得べし、樂も、亦た談話の如

く、短きがうちに味あるものなり、故に、長くとも、歌の二律、即ち、樂譜四員位を奏したらバ、暫らく止むべし、客が尚更らにと乞ハヾ、復たつヾくるとも宜し、初より構なく長やかにするは、不可なり。尚は、樂は、其時の客人を見て、適するものを奏すべく、又た自らよく熟練したるものにあらずバ、決して試むべからず。

夫婦一組の遊に入る事

遊び事を爲るとき、客人甚だ少くして、止むを得ざる時にあらざる以上ハ、夫婦して一組の遊の中に入るべからず、成るべく、相分れて、別組に入るを好しとす。

若き娘とカードの事

若き娘は、カードの遊に加ハるとを非むとも、非禮にあらず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

若き娘と夜會の事

退出の時の心得の事

若き娘は、附添人なくして、夜會に出席するを不可とす。

客人多き宴會に於て、最早や退出んと思ふとき、わざ〳〵女主人を尋ね出して、暇乞するは、宜しからず、斯くは、他の客人に、時刻至れりなど誤り思はせて、遂に會を散ぜしむるに至るべし、尚は退出るとき、途にて他の客人に出で會ふにも、成るべく靜かに密と出るを可とす。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○女子生理　（第四回）

第二章　懐姙の事　（其二）

第一の徴候の事

扨て、第一に懐姙したる事を承知するには、之に種々の徴候あるを認めて、考ふるの外なし、而して、懐姙したることを示すところの徴候數多あるうちに、先づ尤も分り易きは、月經の止むことなり、若し平生常に在るところの月經突然にして止まんには、即ち彼種を宿せしものと云ふべし、然るに、月經は此外いろ／＼の事情ありて、止むこともあるものなれば、只だ此一事にて、明白に承知することは出來がたしと雖も、先づ平素健全にして、差支なく巡りのありたるものは、右第一の徴候に由て、畧ぼ確實なる證所を得た

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第二の徴候の事

りと云ふべし。

月經は、前回にも述べたる如き種々の事情にて、突然止まるとあり、又た、肺病其外の病にても、甚だ不順となるもののゆへ、本文の如く云へるなり。

第二の徴候は、即ち、朝病なり凡そ、懐姙したるものは、種を宿せしのち、二三週間を經ざるうちに、毎朝胸ぐるしく爲りて、嘔氣を催し朝飯を好まず、斯て三四ヶ月の間は、大抵毎朝此のようなる不快を覺ゆるものなり、之をモーニンシックチスと云ひて、朝病と譯す、確かに懐姙のシルシなり、但し種を宿したるものは、悉く此の朝病の氣ありと云ふにあらず、先づ、大抵の婦人方には、多く斯かる心持のする

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ものなれば、即ち以て、一つの徴候とするに足るもの也。

右朝病は、眞に不思儀なるものにて、一種の奇病なり、決して、他の病氣と同じからず、而も朝の内のみ不快にて、其余は平生に殊ならず、故に、懷姙の徴候とするには、甚だ都合よろしきものなり。

第三の徴候の事

第三の徴候は、衝くが如く、動くが如く、破るゝが如き痛み、胸の邊りに起りて、乳粒も亦た痛み、胸の廣ろがるが如き心地のするものなり、之は、懷姙后大抵二ケ月目に起るものにて、時としては、數ケ月後より乳の如き水汁少々づゝを出すこともあるなり、然るに、此の水汁を出すとは、初手の懷姙者には甚だ價ある徴候にて、之あらば、眞よ確に種を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

青線の事

黒環の事

宿しありと思ハるゝとなれども、既に一度び子を産したる婦人には、何の効能もなし、蓋はすでに乳離れをさせたるのちも、時々乳汁を出すと、斯る婦人に於て往々見るところなるがゆへなり、

且つ懐姙の時は、胸に青線明らかに現れたるのみか、胸の工合シッカリとして、手に觸るゝに、何か固まりあるが如く、乳粒も亦た平生よりは、丈夫まして見へ、且つ少しく多きく高かくなりて、その表面に多小の濕氣あるように覺ゆるとなるべし。

又た、懐姙したるときは、乳粒の周圍に飛色の環を現すべし、之は大抵二ヶ月目に初て現はるゝものなるが月を經

第四の徴候の事

るに隨つて、濃くなるべし、特に、髮毛黒く、色白からざる人には、分けて此環も亦た濃色なり、而して、環の大さは、最初小さけれども、漸次に廣がりて、遂には、直徑一寸より一寸五分に至るべし、但し、既に一度び子を産みたるもの、及び數多の兒を擧げたるものは、固より平生にも乳粒の周圍に此環を現するとなれども、此類の人も、懷妊したる時は、環の色一層濃くなるものと知るべし。

扨て、又第四の徴候は、腹內にて、胎兒の動くとなり、之は、種を宿してより、恰かも四ケ月を終りたる時に在るを常とすれども、或は、其前后へ一二週間づゝの遲速あるとあり、甚しきは、三ケ月目に、すでに此徴候を見るとあり、時と

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

胎兒震動と出發の事

しては、五ヶ月目にあるもあり、或は、六ヶ月目にして初て之れあるも、亦往々にしてなきにあらず、然ども、先づ通常の例しを云ハヾ、即ち前に述べたる如く、四ヶ月目に起るものなり。

此の胎兒の震ひ動くとは、懷姙の徴候として、尤も確實なるものなり、女は、此時其身の共に大きく爲るように感ずべし、而して、胎兒の發育せず、不幸にして墮胎するハ、大抵右の震動あらざる以前なり、最早斯く震ひ動きて、生々の運動を爲したる、以上は、大方恙なく産するものゆへ、女は、此時、先づ、其大役の半を濟したりとして、祝賀するも可なるべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

當時の感覺の事

但し、胎兒の震動するとは、其女自身には、大抵分りがたきものなり、其時期に至れば、大抵神經鋭どくなりて、往々ヒステリックを起し、目眩らめきて、倒るゝことあり、腹内には、鳥が羽ばたきするか、又は、何か飛び着き、飛び上りたるやの心地したりと云へる婦人もあれば、之を自ら辨知したりとも、只唯だ僅かにボンヤリと心に感じたるまでなるべし。

墜胎の罪の事

右胎兒震動の感覺は、子宮大きくなりて、腹内にて伸びたると、子宮内の胎兒多少自由に身動きしたるとより、起るとなるが、茲に一つ申置たきは、婦人中、右胎兒震動の感覺あらざる内は、胎兒に未だ生氣なく、全く活たる

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ものにあらずと思ひ違ふものあり、故に、彼の惡むべき墮胎の罪を侵し乍ら、之を左程とも思はざるものあり、甚だ憫れむべき罪人と云ふべきものなり、胎兒は既に躰内に宿りたる當初より、生氣あるものなれども、只だ唯だ、未だ十分に伸びざると、猶は米に生氣あれども、未だ稻とならざるものゝ如し、故に、胎兒を殺して墮胎するは、既に生れたる我子を殺すに均しく、眞に大罪にして、天の許さゞるところなり、左れば、凡そ墮胎したるものは、其身躰非常に痛みて、決して元に歸へしがたし、一生不幸なる常病人となりて、世を怨むの外なきものなれども、是れ必竟神の律法を破りたるの天罰として致

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

し方なきものなり。

脹滿と懷姙との區別の事

脹滿を誤りて、懷姙とするものあり、世には、往々その奇談少からぬものなるが、之は、總べて、只だ一つ二つの徴候により、遽かに判斷するよりの誤なり、實際脹滿と懷姙とを精しく區別するは、醫師の事なるが、玆に先づ其大體を云はゞ

(一)脹滿には、腹の工合時としては、多きく、時としては小くなる(二)腹を固く壓すとき、何か風氣の逃るゝようなる音すべし、(三)之をコツ〳〵と叩いて見るに恰も太鼓を打つが如き音すべし、(四)指にてつよく突いて見るに、風氣が左右に分るゝが如き心地すべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

(一)懐姙には、腹の工合シカとして、且つ日々に多きうなるべし、(二)腹を壓して見るに、固く確として動かざるの風あり、(三)之をコツ〳〵と叩いて見るに、恰もテーブルの上を打ちたる如く、重き定りたる音すべし、(四)指にて強く突て見るに、向ふに肉ありて故障する如く、思はるべし。

脹滿と懐姙との相違は、大抵右の如きものなり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○育兒心得　（第四回）

問。引續き六七月たちたる後に用ゆべき食品の製法を承りたく候。

答。前に第六法まで申したるに付き、左に尚は少々御答いたすべし。

第七法　第七は、小麥粉を燒かしたるもの二分に、ヲートミール（ヲート麥の粉なり）一分を混じたるを、例の如くして料理したるものにて、小供が泌結したる時、殊に効あり。

第八法　第八は、ラスクと(Rusk)と云へる西洋の乾菓子を、一時間水煮にして、後ちフホーイにて能く叩き、之に棒砂糖を混ぜたるものなり、之れ亦た泌結したるを解くに効能ありと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

云ふ。

第九法

第九は、麪包焼の所にて、麪包を焼たるとき、其の上ハ皮となり居るものを、一時間水煮にし、之に棒砂糖を混ぜて例の如く料理したるものなり、但し、小供が泌結したるときは、生砂糖を用ゆるを可とす。

第十法

第十は、上等の米を、一時間水に浸し置き、後ち取出して、更に清水を加へ能く煮熟し、味噌こしにて磨り砕き、此の砕きたるものに、水を合せて鍋に入れ、砂糖の塊一つ二つを入れて、更に十五分間煮立てたるものなり、而して、之に三分一の牛乳を合せて、上ハ乳の如くせバ弱き小供にハ、尤も適したる食料となるなり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第十一法

第十一は、純粋の水に、良好の小麦粉を混ぜて、能く捏ね置き、別に新鮮の乳を火上に置て煮たるのち、之に砂糖の塊まり二つを加へ、更に煮たる處へ、前の粉を加へ、二十分間文火の上にて温むべし。

大略先づ右様の方法にて候。

葛の事

問。葛の事も御説ありしが、一體、之は宜しきものに候や、甚だ無効のようにも思はれ候、何如承はり度候。

答。元より澱粉のみ多きものに候へば、小供の骨又は肉をつくるには、左程功能もあらざるかと存ぜられ候へども、惣じて、介弱き體の小供には、第一よく其體内を温めて、宜しからんと存じ候尤も之は、生れてのち六七ケ月立ち

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

たるのちならずは、決して御用ゐるまじく候。

牛肉の煮汁の事

問。牛肉の煮汁などは、随分養多きかと思はれ候が、之は、用ひて宜しく候か伺度候。

答。一體は、宜しきものと致すは勿論なれども、經驗上より考へ見ますに、胃の内に滯りて、酸敗し、之れよりして脹滿胃痛の如き疾を起し、又時としては、下痢腹痛などを起すともあるものなれば、余り宜しからぬものと相考居候。

食用の器の事

問。前に御話被下候食物類は、何れも皆な汁の如きものと存じ候が、之を飲ませるには、何如の器を用ひて然るべしや承はり度候。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

答。之は、西洋小間物店にて賣捌候、かの乳飲みの瓶が最も宜しく候、其形、第一母親の乳房に似て、天然に適ふのみか、之を吸ふには、自然舌を使ひて、ツバキを出さしむるより消化の上にも、効能多きものに候。尚は此の器は、能く好く御洗ひなさるべし、殊に夏向は、注意して時々温湯を通し、彼のゴムにて造りたる管、若くは管の口などを、極て綺麗になさゞれば、直ちに腐れたる汚物を生じて、小供の爲め大なる害のあるものに候。又序でに申上置たきは、之に容れて食べさする食物は、總べて乳と同じほどの温かさにして、御飲ませあるべし、之より熱くも冷たくもありては既に自然に反するものに候なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

牛乳を用ゆる事

問。牛乳を用ゆるとにつきては、前にも承ハり候が、尚は心得べき事有之候や、伺度候。

答。左樣、まづ牛乳は、成るべく、同じ牝牛より搾りたる乳汁を、毎日用ゆるように成さるべし、之れ、眞に利益あるとなれども、實際なか〳〵六かしき節もあらん、然れど、成べく其心持にてて、牛乳屋に掛合ハるべし。

砂糖加減の事

問。かの人造食物に加ふる砂糖につきては、何か別に心得申すべき事有之候也。

答。別段に無之候へども、總べて成るべく加量を少なくされたし、餘り多きときは、胃を痛るものに候、尚は序でに申度は、この食物にいつも少々づゝ食鹽を御加へありた

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

し、小供の衞生上餘程効能多きものに候なり。

人造食物を併せ用ゆる度數の事

問。 前に種々伺ひたる人造の食物を、母親の乳を飲むと同時に用ゆると、必要と相成候ようの節は、毎日大抵何度ほどづゝ飲ませ申すべくや、前に母親の乳を飲まするとに付て御伺ひ置候へども、此儀も何か大切の心得あるべき儀と被察候。

答。 左様、二十四時間にて、先づ二回より多くは決して御與へなさるまじく候、前にも申せし如く、小供の發育には母親の乳が最良のものに候へば、最初三四ヶ月迄は、決して餘の人造乳などを御用ひなるまじく、前に種々申上たる食物の如きも、必竟六七ヶ月たちてのちに、用ゆべきも

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

のに候へバ、此邊決して御思ちがひなきようくれ〴〵も申置候。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○新書出版書目

●小兒健全 攝生法　一冊十八錢　郵稅四錢

右は産婦小兒の養生法を。平易なる文章にて。何方にも分り易さよう。認めたる者なれども。所論を學理に照し。實際を鑑み。專ら當今の養生法。此道を[illegible]さゞることを教へたり。故に月經の心得より。妊娠したるか否やを知ること。出産の期日を知る法。妊娠中の養生法。産後の養生法。赤子のとりあつかひ。乳を飲ませる事。母の乳を飲ませずして子供を育つる法等ことごとく信切。に教へたり。世の母たらん人は。何とぞ一冊を座右に備へ。愛子の健全を。保侍ありたし。

田口卯吉君結髮沿革附錄○和崎[illegible]君校○坂本嘉治君跋渡邊鼎君著

●束髮案内　美製小本八十頁細圖入　定價十五錢郵便稅四錢

當今束髮流行の折柄其結び方不案内の婦人尠なからず此書は日本婦人に適する束髮二十餘種の結び方を丁寧に教へ一々細圖を附して親切に案内すれば如何なる僻遠の地に在りて束髮の風を知らざる人々もこれに依りて容易に自ら試るを得べし特に田口卯吉君の論文束髮會の規則其外も添へたれば結髮改良に志ある人々は宜しく一讀あるべし

統計局次長世良太一君序○統計協會議員呉文聰君序
朝野新聞記者横山雅男君著

●婚姻論　一冊定價三十五錢　郵稅十四錢　洋綴美本

此の書は朝野新聞記者横山雅男君の著にして全篇を二十八章に頒ち總論。婚姻の定義。婚姻は人類の天性。婚姻の効力等より說起こ早婚。晩婚。私婚。血族婚。離婚。一夫一婦の正婚など悉く歐米の統計上より論及し議論正確文章平滑一讀我國舊來蠻風の結婚を改良すべきの必要を感ずるの書なり

○鈴木弘恭大人著述○小中村清矩大人評

改正増補 文法口授　全一冊●一名和文獨案内　定價十八錢　郵稅四錢

此書ハ文章家なる鈴木大人が多年諸學校の生徒に和作文を授業せられしを筆記したるものにて[illegible]に出版したる所大に諸校の實用を得たれば尚亦今般大人に乞ひ改正増補して古人の文章數十篇を卷尾に付し或ハ雅文を俗文に譯し或ハ漢文を和文に譯したる作例をも擧げたり然れば啻和文のみならず漢文を學ぶ人の和文を漢文に譯すにも大に益あるべし且女學校などに於て和文を學ばんとする生徒諸君の爲めには此に過たる良書なかるべし

●右文法口授は學校教科用の書籍に適當也とて發兌后一週日を經ざるに既に成立學舍女子部及び頌榮女學校並に明治女學校及び長榮女塾等の教科書となりたり

鈴木弘恭君著

●つれ〴〵艸講義　●近刻

坂本嘉治編

●女學叢書 木村鐙子の傳　●來る十八日發兌

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

女學雜誌第六十八號目錄

●社說　避暑の遊を勸む●論說（特別寄書）婦人の會合（中島とし子）○婦人敎育談話會（矢田部良吉君）○女子と衞生（高木兼寬君）●叢話　女子の發明力○和文學講義○和歌の事（鈴木弘恭君）●批評　新粧の佳人●佳傳　サラマーテン四人を敎育したる事●小說　薔薇の香、第三回）●寄書　東洋英和女學校閉校式（德田春子）女學雜誌の解停を祝す（渡邊幸子）●新報　皇后陛下の詠歌。華族女學校皇后陛下の行幸。横濱山手共立女學校。駿臺英和女學校。海外女事○婦女市政權其他十五件●廣告數件●事物の起元

女學雜誌第六十九號目錄

●社說　女權伸張に表裏の二途あり（第一裏面より之を論ず）●論說　東京婦人敎育談話會（永井久一郎君）●叢話　賢女の德義○子育ぐさ●批評　家計簿記法○西洋編物法○歐米禮式○婚姻論●佳傳　木村鐙子の傳の序●小說　善惡の岐（中島とし子）薔薇の香第四回（月のやしのぶ）●寄書　女は男を助るやの試驗（那珂璋子）●新報　華族女學校。婦人手藝學校。女敎師招聘。愛媛博愛社。看護婦洋行●廣告　數件●十一もしも草

女學雜誌第七十號目錄

●社說　時事新報耶蘇敎會女學校敎育法を評し再び外國人が設立する女學校の事に及ぶ●論說　女子と衞生の四（高木兼寬述）●叢話　東京婦人矯風會主意書○賢女の德義の二○皮膚の模樣及沐浴の事●佳傳　グローシアス夫人夫を救ひたる事●小說　善惡の岐（中島俊子）●寄書　倫敦タイムス日本女服改良論（高根虎松）●新報　女子の躰育法。梅香女學校。景山英女へ差入物。女生徒の洋裝。貴婦人の乘馬○海外女事。女學生の名譽其外數件●廣告

女學雜誌第七十一號目錄

●社說　女權伸張に表裏の二途あり（第二裏面より之を主張する事）●論說　女子と衞生の五（高木兼寬述）○東髮の事（中島とし子）●叢話　賢女の德義○女學校の寄宿舍●批評　矢島錦藏氏譯述斯氏女德新說を評す●佳傳　跡見花蹊女史の傳肖像○グローシアス夫人夫を救ひたる事（其二）●小說　薔薇の香第五回（月のやまのぶ）●寄書　隅田川に掉さす長歌（ゆり香）○倫敦タイムス新聞日本女服改良論（高根虎松）●新報　女子敎育に關する森大臣の意見。女學叢誌其他數件●廣告

東京京橋區日吉町八番地
發行所　女學雜誌社
持主兼編輯　巖本善治
印刷　森田豐

東京秀英舍印行

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY